

ウルリム
響

울림

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第52号

2010年7月20日発行

題字：康秀峰

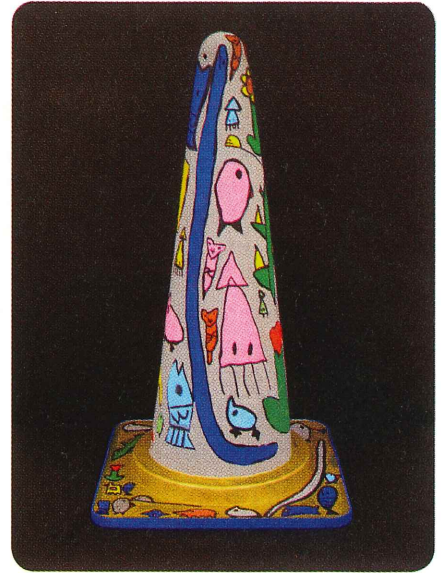
URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: ikuno@nskk.org

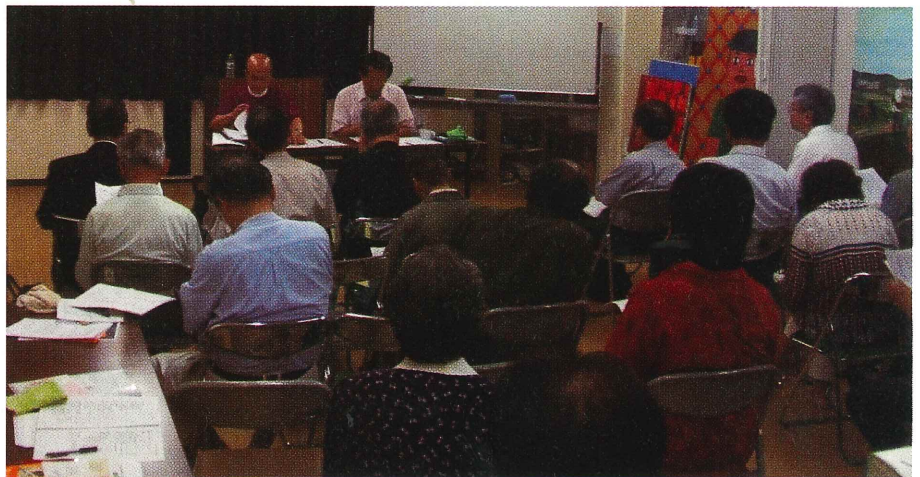
聖公会生野センター 検索



のりばん濟州島旅行
5月に3年ぶりにのりばんで濟州島に行ってきました。ハルモニたちはまだまだ元気です。



阪神高速展
阪神高速からの依頼で、落下物を使った作品製作。落下物防止の啓発展をおこないました。



会員総会

6月27日、年に一度の会員総会開催。
無事終えることができました。感謝です



喫茶「マウム」

鶴橋に新規開店の喫茶「マウム」。コーヒーだけでなく韓国の伝統茶も美味しくいただけます。
(鶴橋 2-2-19 2F ☎ 06-6712-6630 営業6時から18時まで)

わたしには、この囲いに入っていない ほかの羊もいる。

ヨハネによる福音書 第10章16節

テモテ 山崎 貞司

私たち九州教区は新たな宣教を模索するために5月に教区大会を開催し、大韓聖公会ソウル教区前主教朴耕造^{パク・ギョング}師父をお招きし、今大韓聖公会ソウル教区にて行われている「分かち合いの家」の宣教活動をお聞きしました。今社会で苦しみの中にある人々、殊に受入れられない状況の中で生活している人々に対して神様の心を伝える、あなた方が大切なんだとメッセージを伝えようとされている姿を示されました。今、私は再び宣教の原点に立ちかえる道を示された思いです。私の原点である上記のみ言葉を大切にしながら、多くの方々との交わりを大切にしていきたいと願っています。

現在、私は毎週火曜日、久留米から80キロほど離れたところにある「リデルライトホーム」の中にある降臨教会に通っています。週の一日をそこに住んでおられるの方々との交わりをしています。

さて、このリデルライトホームの前身は「回春病院」でハンセン病患者の方々の方々の病院でした。その病院を創立したのがハンナ・リデルで後継者がエダ・ライトというイギリス聖公会の宣教師です。

ハンナ・リデルが日本へ宣教師として派遣され、現在の熊本大学である第五高等学校の英語の教師として赴任しました。大学の同僚として迎えた人たちは歓迎会を兼ねて本妙寺のお花見を計画し、花見にでかけました。この日は恐らくその年のイースターの日だと言われています。

当日、同行しましたリデル女史は本妙寺に着き、きれいに咲いている桜を見るのですが、目についたのは桜の木の下にいて、行きかう人々に憐れみを請うている人々でした。ゆっくり見つめていると彼らは病気に罹っていました。彼女は初めて見る病気でした。彼らは「ハンセン病」に罹り、家庭から見放され、社会の中では生活できないでここにいた人々でした。彼女はその日の日々に日課の空欄に「初めてハンセン病患者を見た(アイソウ レプラ)」と記して、その日の驚き、ショックを残しています。

「なぜ？」心の中でこの言葉が湧き出てきました。神様が私と同じように生活するように造ってくださった私たちではないか。なのに、この人たちは、ここにいて人々に憐れみを請わなければならないのか。日本の社会はおかしいと思いました。

そこで彼女は神様のことを伝えるには、このような人々、孤独で、しかも治療も受けられない人々を大切にすることだと考え、彼らの世話をするために施設を作ることを決意しました。そして「回春病院」を設立し、人々から見放されたハンセン病患者の人々を集めては病院に連れて行き、世話をしました。

1941年に国の命令によって閉鎖されるまで患者を受け入れて、神様から造られた人として接し多くの人々から「お母さん」と呼ばれ生涯を捧げたのです。

彼女のあと、エダ・ライトが働きを受け継ぎました。

私は二人の意思を受け継いで現在「老人ホーム」として働きをしているリデルライトホーム降臨教会チャプレンとしての働きをさせていただき、上記のみ言葉を噛み締めています。

私たちは区別をすることを大切にすることがあります。例えば、洗礼を受けている人、受けていない人、又学力がある人ない人、というように区別をつけて人を判断しています。又受け入れる、受け入れないということもしているでしょう。

しかし、神様はそのような区別をしないで人々を全て受け入れてくださっています。上記のみ言葉はそのことを私たちに語っています。その言葉を受けている私たちは、目に見えるもので人々を区別することなく交わりをすることができるように造られています。この言葉を受け止めて多くの方々との交わりをすることにより人間として成長していくことでしょう。

(やまざき ていじ 司祭
九州教区 久留米聖公会教会牧師)

安重根の祈り——韓国併合100年をキリスト者の立場から考える

井田 泉

1909年10月26日、^{アン・ジョンギン}安重根はハルビン駅で伊藤博文を射殺した。彼はその場で逮捕され、旅順監獄に護送された。

当時、日本聖公会の機関誌であった『基督教週報』は「朝鮮の伝道」と題する社論の中で次のように述べた。

「伊藤公を狙撃したる^{アン・ジョンギル}安応七(注・安重根の字)はカトリック教徒なりと某新聞は伝えたり。日本天主教の大主教は直に電報を以て調査せしめたるに彼はカトリック教徒にあらざることを確め得たりとも称す、由来平壤付近には利害の上より基督教会に入る朝鮮人^{チョソン}募からずと称せらるゝが故に安応七にして教徒たらずとするも教徒たるの価値なき幾多の所謂信徒其辺に発見さるゝやも知るべからず。仮りに安応七をして教徒の名簿に名を列するものならしむるも、朝鮮国のために尽したる元勲を暗殺したる罪は安の罪にして基督教の責を負ふべきものにあらざるは言迄もなき事なり。」(同年11月12日)

安重根は仮にキリスト教徒であるとすれば「教徒たるの価値なき信徒」、「有名無実の雑信者」と『基督教週報』は決めつけ、伊藤を「朝鮮国のために尽したる元勲」と称賛したのである。

かつて私は、キリスト教徒と言われる安重根がその内実においてどの程度キリスト教なのかを知りたいと思い、公判記録等を読みふけたことがある。そして得た結論は、彼は伝道意欲も強く、自分の長男ブンドを必ず将来神父とならせてほしいと母と妻に遺言するほどの正真正銘のクリスチャンである、ということだった。伊藤博文射殺も、その是非はともかく、韓国の独立と東洋の平和のためにそれしかない決意し、祈って実行したものであった。

安重根は伊藤博文の罪状15カ箇条を申し立てている。「伊藤さんは、東洋の平和を攪乱しました。その訳と申すのは、すなわち日露戦争当時より東洋平和維持なりと言いつつ、韓皇帝を廃位し、当初の宣言とことごとく反対の結果を

見るに至り、韓国民二千万人皆、憤慨しております。」(第12)

死刑が確定した後、安重根は自分に洗礼を授けたウィルヘルム神父(フランス人宣教師)との面会を切望。主教の反対を押し切ってやってきたウィルヘルム神父から告解と聖体拝領の聖事(サクラメント)を受け、喜びと感謝に溢れたという。

死刑執行直前、「最後に言い残すことはないか」と尋ねられて、彼はこう答えた。「自分の行為は、東洋平和のためである。韓・日両国民が、互いに一致協力して、平和を図ることを望む。なお、最後に絞首台で東洋平和のために祈願したい。」

彼は絞首台の階段を七つ上った後、やや広くなった所で3分ほど静かに祈り、そして息絶えたという。1910年3月26日午前10時15分、イースター前日の聖土曜日であった。

看守として5ヵ月を旅順監獄で安重根と共に過した日本人憲兵、千葉十七は、安から深い人格的影響を受け、退職後も日々、安の霊に向かって合掌し、「安重根と、その国の人々」に対して懺悔する毎日であったという。

安重根の死から5ヵ月後の8月29日、日本は韓国を併合した。それから100年の夏を迎える今、東洋の平和と日韓の一致協力を願った彼の最後の祈りを無にすることのないようにしたい。

(いだ いずみ 京都聖三一教会牧師)

もくじ
聖公会生野センター フォトギャラリー/1
わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。/2
時のしるし「安重根の祈り——韓国併合100年をキリスト者の立場から考える」/3
朴耕造主教—分かち合いの家から社会宣教へ—九州教区大会記念講演録/4-5
韓国からの便り ソヨリ村から、「100周年」/6-7
多民族・多文化共生のすすめ 在日朝鮮人の本名問題から何に気がつくべきか/8
こんな本あります 李姫鎬『夫・金大中とともに』/9
デイ・サービスセンターの働きと私の思い/10
2009年度 会費/献金ご納入者芳名/11
編集委員リレーエッセイ・余韻/12

＝分かち合いの家から社会宣教へ＝ 九州教区大会記念講演録

パク キョンジョ
朴 耕造

【右の頬をうたれたら……】

マタイの福音書の5章(38節)に頬を叩かれる話が出てきます。

『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし私は言うておく。悪人に向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら。左の頬も向けなさい。

相手の右の頬を叩くのは私の手の甲で叩くことであります。当時の社会で相手の頬を手の甲で叩くという事はその人にどのような身体的傷を与えるよりも相手を侮辱する為です。相手の右の頬を叩くという事は同等な関係からはできない行動です。この行為は権力者が下の人に、主人が奴隷にする行為です。「わかったか？」と軽々しくして、恐怖心を与える行為でありこれは不平等な支配関係を強化する行動です。

私たちがこの不当な侮辱を受けた時、私たちがとる道は二つです。一つはその侮辱的な暴力の前で屈従したり、逃げる道であり、もう一つは同じように暴力で報復する道です。普通私たちは侮辱的な暴力を受けた時、この2つの道から一つを選択します。私たちキリスト者はイエスさまのこのみ言葉をそのまま耐えて、忍耐せよという、み言葉として理解してきたので不当なる権力の横暴や戦争のような暴力を前にして沈黙で一貫とした場合が多くあります。

【非暴力的抵抗】

イエスさまは「誰かが右の頬を叩いたら左の頬をさしだせ」とおっしゃいました。そのまま受けて我慢せよということでしょうか？ 私たちがこのみ言葉の意味もう少し明らかに理解するためには「復讐するな」とも訳されるこのみ言葉をよく理解せねばなりません。

ここで「復讐するな」と翻訳された単語は軍事的用語であり、暴力で抵抗することを意味します。暴動を起こしたり、蜂起して対立する意味という事です。ですから「復讐するな」という意味はそのまま我慢せよという意味ではなく、誰かが暴力で侮辱を加えたら同じように暴力で張り合うなというみ言葉です。このようなイエスさまの教えを土台にした初代教会の伝承を新約聖書から見る事ができます。

「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」(ローマ書 12:21)

「だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。」(テサロニケ I 5:15)

「悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。」(ペテロ I 3:9)

「誰かが右の頬を叩いたら左の頬をさしだせ」というみ言葉の真の意味は誰かが侮辱的な暴力を加えたとしても同じ方法で報復をするなどということです。その暴力に屈服して我慢して過げせということでもありません。当時、この言葉を聞いていた人たちはユダヤ社会で権力者たちから抑圧を受けていた貧しい人たちでした。イエス様はそのような人たちに自身の尊厳性

を侮辱して暴力を加える支配者たちにそのまま堪え忍び服従せよとおっしゃったのでは決してありません。

左の頬を差し出せということは私の尊厳性を守りながら相手の不当な暴力的侮辱を私は受け入れないという断固とした意志が盛り込まれた行動です。この行動は支配者の不当な暴力を暴露し非暴力的な方法で抵抗する行為です。これがまさしくイエスさまが教えになり歩まれた新しい道でした。そしてイエスさまはついに十字架の道としてこの世のすべての暴力の悪循環を終わらせる道を選ばれたのです。

この教えを社会的な関係から創造的に実践した人がまさにアメリカの人権運動家のマルティン・ルーサー・キング牧師でした。白人たちが黒人たちの頬を打ちながら彼らを嘲弄して侮辱した時、ある黒人たちは暴動を起こし抵抗しました。またある黒人たちはその暴力の前で屈従して生きていました。しかしキング牧師は白人たちの侮辱と暴力の前で報復や屈従ではない新しい第3の道を歩みました。それは非暴力的な抵抗の道でした。キング牧師はこの道を通してアメリカ社会の憎悪と暴力を克服していったのです。

又、インドのガンジーはイエスさまの教えを国家と国家間で創造的に適用し、実践することにより人類社会に新しい可能性を投げてくださいました。この聖書の理解をもって過去、韓国聖公会で起こったいくつかの社会運動と信仰運動の経験が分かち合いしたいと思います。

【分かち合いの家運動の始まり＝疎外された人と共に】

1980年代の韓国社会はクーデターで政権を得た朴正熙が殺害されて新しい軍部が不当な方法で権力を掌握して無慈悲な暴力をおこなった時期でした。新軍部に抗議した光州市民を新軍部は無慈悲にも銃剣で制圧してこの過程で多くの市民が軍人たちの銃弾を受けて死ぬという事が起こりました。新軍部は韓国社会全体を暴力的な方法で統治しましたが、多くの人々がこれに抵抗をしました。教会の中でもこの抵抗運動は活発に起こり、韓国聖公会の中でも意識を持った神学生と青年たちが既存の制度的教会の限界を認識し教会の改新と民主化、そして社会変革という時代的課題を抱いて取り組み始めました。

当時、私はソウルの教会で平凡な牧会をしていました。毎晩若く意識を持った神学生が集まり読書会をし、討論して夜遅くまで話を始めました。初めはこの集まりがあることすら知りませんでした。1986年、私は一人の神学生に手を引かれて撤去民(注：スラムに住んで強制撤去される人々)が集まり暮らす町に行くことになりました。当時は86年のアジア大会、88年のソウルオリンピックを前にして政府は「環境美化」「住居環境改善」という名目で都市貧民地域の不良住宅を壊して、新しい建物を作り始めた時でした。

撤去現場はまさに目を開けて見ていられない残酷な光景でした。酒に酔った数百名の撤去班員が重機を使って家屋をつぶし、反抗する住民に棍棒や拳で暴行を加え、血みどろにな



講演する朴主教、隣は通訳の呉光現総主事

った子どもたちを放り投げて、傷を負わせ、老人が部屋にいても屋根に穴を開け重体に陥れることが起こっていました。暴行に耐えられない住民が道ばたに逃げると待ち構えていた戦闘警察が彼らを連行して撤去が完了するまで警察署に留置しました。

家をなくした都市貧民は郊外に追われて劣悪な環境で暮らしていたのを私は神学生の手で引かれて初めてその場の惨状がわかりました。司祭である私より後輩の神学生たちが教会と社会に対する問題意識をより鋭く持っていたのです。

訪問した都市郊外の貧民地域の裏山に登ってみたら青少年たちが吸ったタバコの吸い殻と麻薬を吸引して捨てられた容器があちらこちらに散らばっていました。その神学生はここで教会が何かをしなければならないと、私を説得し始めました。私は当時、教務局長という職で、金成洙主教様の確固たる宣教意志に力を得て、そこで小さな部屋2つと台所がついた家を借りました。そして神学生たちと青年たちがそこで暮らし始めました。

彼らは貧しい人たちに何をするかと言うよりはそのまま彼らと一緒に暮らし始めたのです。これが「分かち合いの家」の始まりです。

貧民地域で暮らしていた人たちは大部分が日雇い労働者だったので子どもたちを見なければなりません。そこで始まったのが託児所、学童保育、夜学のような活動でした。初めは半信半疑で懐疑的な視点で眺めていた一般の教会の人も教区の確固たる宣教意志と司祭たちの情熱的な献身を確認して物心両面で助け始めました。この相互間の協力は他のプロテスタント教会とは違い、聖公会「分かち合いの家」は一つのいい宣教的モデルとして位置をえることができました。そして多くの若者たちが集まり共に活動を始め、運動を通して聖職の道を歩みました。当時の社会的状況に不満を抱いて挫折していた若者たちと既存の教会で対して懐疑的だった若者が聖公会に希望を見だし、集まりだしたのでした。そこで70年代後半まで、ソウル教区の聖職者数は20名の水準でしたが金主教様が教区長であった80年代以後、若く、賢明な聖職者の数が急に増えることになりました。

【分かち合いの家運動の広がり】

ソウルで始まった聖公会「分かち合いの家」はソウル教区だけでなく大田、釜山教区にも一つの信仰運動として広がっていき、各地域に必要な形で位置を得はじめました。そうして大教会の否定的イメージとは違い、小さな聖公会が影響力のある教会として韓国社会に次第に知られていきました。そしてついに民主政府になって「分かち合いの家」は政府の福祉政策事業と緊密な協力関係を結び活動が一層多様に、広がっていきました。

「分かち合いの家」は暴力的な社会に順応せずに、そこに向き合って抵抗しようとした勇氣ある平和運動であり、信仰運動でした。意識のある青年とそれに合わせて、時代の兆しを読み取り勇氣を与えた教区と力を集めて彼らを支えた数多くの信者がいたからこそ可能だったことでした。

今日、私たちが生きている資本主義の時代は人間の利己心と貪欲さがその極みに達しています。人間の限りない貪欲さは金融危機と自然破壊、競争と争い、テロと戦争を呼び起こしています。この時代に私たちキリスト者はこの世で暴力に屈服することなく抵抗することにより平和の神の国を建てることに献身せねばなりません。

【多様な社会宣教へ】

1986年の「分かち合いの家」から始まった大韓聖公会の社会宣教は以後、多様な形態で発展しました。その中の一つが移住労働者の為の「シャロームの家」です。現在韓国では約35万名の移住労働者が暮らしています。そのうち約19万名程度が「不法滞在者」です。賃金未払い、労働災害、そして各種差別による人権侵害が非常に深刻な状況であり、1997年聖公会「シャロームの家」が開設され、移住労働者のための本格的活動に着手することになりました。

草創期の分かち合いの家で活動した女性活動家は売春の女性をサポートする売買春女性のシェルターを運営しながら最も低いところでイエス様の教えを実践しています。そして野宿者の為のシェルターが開設され、フードバンク運動(食事をとることが難しい人たちに食事を提供する事業)が導入され貧しい人たちに食べ物を提供しています。そして、障がい者のための活動、非行青少年の為のシェルター等が開設され活動中です。

【南北平和統一へ＝まず人道支援から】

これとは別に聖公会は早くから平和統一運動に取り組み、北朝鮮で飢えて苦しみを受けている人々への人道的支援のため多くの努力を傾けてきました。そうして2008年11月には韓国で「世界聖公会平和大会」を開催し、世界の聖公会の指導者と平和運動家を招請し「東北アジアの平和」に対して深い議論をしました。そして朝鮮戦争後、初めて北朝鮮の地に世界の聖公会関係者が集まり聖餐式を捧げ、東北アジアの平和の為に祈りました。又、GFSの会員を中心に脱北女性への支援運動である「井戸端プロジェクト」を進めています。他の教団の人たちはこの話を聞けば、とても驚きます。どうして、この小さな聖公会が多くのことで、大きな影響力を行使できるのかと尋ねてきます。

しかし、多くの問題点を抱えていることは事実であります。日本のように安定した社会ではこのような活動は難しいかもしれません。しかし韓国という社会はとても不安定ですが躍動的な社会であるのでこのようなことが可能ではないかと思えます。

【終わりに】

九州教区が五十嵐正司主教様の人徳あるリーダーシップにより、大過なく平和なのは神様の大きなめぐみです。そして九州教区が厳しい中にあってもフィリピンの教会を支援しているのは本当に素晴らしいことだと思います。私は韓国と日本の教会が共にアジアの苦痛を分かち合い成熟した教会に育っていかねばならないと思います。まさにこのことの為に神様が私たちを招いてお互いが交流するようにしてください協力するようにしてくださいのではないかと私は考えています。(了)

(ばく・きよんじょ 主教 前ソウル教区教区長)



大会終了後の記念写真

編集部から
聖公会生野センターとも交際の深い朴耕造主教前ソウル教区教区長が5月に九州教区の教区大会に招かれ講演をされました聖公会生野センター総主事の呉光現が原稿の翻訳と通訳の奉仕を致しました。聖公会生野センターの活動とも深い関係にある韓国の社会宣教について非常に意味のある講演でしたので九州教区と朴主教様の承諾を得て、講演の要約転載します。(編集部)

ソヨリ村から、「100周年」

中村 香

「ああ。そんなになるだろう。えらい昔のことになったな」。今年韓国併合 100 周年の年だと言ったら、村のハラボジ（おじいさん）はそう言った。何年生まれかと聞くと日本語で「昭和 5 年 5 月 11 日」と言った。改め、1930 年 5 月 11 日生まれ、80 才のヨンモハラボジである。ヨンモハラボジは日本語をよく覚えていて、私に日本語で話しかけてくれる。戦時中の様子を訪ねると、古道、宮村、毛利、山根、渡辺、そして長崎旅館（日本人専用）と、日本の名前がずらずら出てきた。日本人は村には来ず、市内で精米所、食糧所など、お金の儲かる仕事をしていたという。当時日本人は、韓国朝鮮人のことを「半島人」と呼んだそうだ。日本人は「バガ」（韓国での発音）というよく怒ったと言って笑った。日本人が「日本の野郎」と韓国に嫌われるのは、家にある食糧、米、豆、雑穀全て盗っていき、自分らは山に行き、



村の人たちとの楽しい「犬肉」パーティ

苦くない葉っぱ以外は全部食べたからだと言う。戦争が終わって日本人は家も釜も全部置いて体だけ帰った、かわいそうだった、とも言った。韓国と日本とこれからどうなったらいいですかという問いには、「今も韓国と日本とこれからどうなったらいいですか」という問いには、「今も仲がいいんだから、ずーっと仲が良ければいい。東洋は人種が一緒なんだから、小さい島、大きい島、兄弟の島だ」、と言った。

ヨンモハラボジと同年のサンピョハラボジは、日本人のことを例にもれず「日本の野郎」と言った。食物だけでなく、土地、畑、田んぼ、全部持って行った。箸、スプーン、屋根の藁まで持っていった。命令は全部聞かなければならなかったし、聞かなければ拘束、何もしなければ何もしないで殴られた。お米を隠しても見つかってしまうし、自分が農業している意味がなかった。腐った豆のおかゆを食べていた。人が生きていたとは言えない。解放になって、自分が作ったものを自分が食べた時、ああ、これが「解放」ということなんだと感じた、と言った。それでも、「今も日本と韓国は交流してるし、

昔日本の野郎がしたことは忘れて、過ぎたことなんだからね、お互い敵と考えたらだめだ。最近日本政府も変わって、昔の過ちに気づいているようだ。しかし、サッカーなどで日本に勝ったら、何だかスツとするね（笑）。日本政府がサンピョハラボジをはじめとする韓国人の期待を裏切らないことを願う。

ヨンはじめとする韓国人の期待を裏切らないことを願う。

ヨンモハラボジは私の子どもができないのを心配して、山で人蔘ヨモギとメハジキを見つけては煎じて飲めと持ってきてくれる。日本人の私に「娘のようだ」と言う。

一方、昨年の 8 月 15 日の光復記念日（終戦記念日）に教会の保育園の子どもたちが私に来て言った。「イモ（おばさん）、ホントに日本人？日本人

は昔、韓国の宝物全部盗っていったから、イモは僕たちにお菓子とかおもちゃとか買ってあげなさいいけないんだ。買って買って」。最終的には「日本人め〜、日本人め〜」と私の回りをぐるぐる回った。一体、保育園でどのように習ったのだろうか。当事者のハラボジたちが恨みを乗り越えて「日本と仲良く」と言っているのに、戦争を知らない子どもたちが日本に敵対心を抱く。歴史教育は難しい。

日本では韓国併合 100 周年を大々的に捉え、様々な会議、プログラムが行われ、テレビでも歴史番組が流されていると聞く。マスコミの歴史教育を全て信じることはできないが、100 年経ってようやく本当の歴史を知る努力がなされている。学ぼうとする日本人が増えている。

韓国では、どうか私の住んでいるソヨリ村では、韓国併合 100 周年の単語すら聞くことはない。ソウルに行った時、繁華街の大画面に、韓国の英雄「安重根 100 周年」（伊藤博文暗殺者）の VTR は頻りに流されていた。韓国では韓国併合ではなく、日韓合邦あるいは国辱 100 周年と呼んでいる。韓国併合 100 周年とは韓国にとってはただの暗黒歴史、日本に植民地化された、思い出したくない悲劇の歴史に過ぎないのだ。何が 100 周年だ、という気がしないでもない。

そして実際のところ、100 周年どころでは無かった。ここ 2 年間、現在の韓国は揺れに揺れている。李明博大統領になってから国民のデモは後を絶えない。四大河川事業（韓国に流れる四つの川を工事して人工河を作る）反対デモ、国民の 70% が反対しているのにも関わらずすでに工事が始まっている。5 月の天安号沈没事件、6 月に行われた統一地方選挙。李明博政府と政権与党ハンナラ党は惨

敗したにも関わらず、四大河川工事はごり押しされているし、天安号沈没事件を北朝鮮の攻撃とし、武力衝突の危機が高まっている。その上、米国と「日本」がそれを助長している。この二つの強国は、未だ変わらず同じ歴史を繰り返そうとするのか。

「戦争」が、起こるかもしれない。韓国併合 100 周年目にして。とは、言い過ぎだが、選挙前に李明博政府とハンナラ党は天安号沈没事件を選挙に悪用し、南北関係の緊張を無駄に高めた。しかし、もし戦争が起こったら、果たして私は危険な韓国を置いて安全な日本にノコノコと逃げ帰ることができるのか。

韓国併合の落し子、朝鮮戦争南北分断は終わってはいない。南北統一問題、戦争責任問題、旧日本軍性奴隷（従軍慰安婦）問題、在日の問題、沖縄をはじめとする米軍基地問題。「韓国併合 100 周年」は過去の話ではない。問題未解決、現在進行形の話なのである。

私は日本人で韓国に住んでいる。私は韓国に住みながら過去に日本軍がしたことを忘れないように気を付けている。一生「すまない心」を持って生きようと思っている。韓国人と友達になろうと思っている。子どもたちには何も言えないがただ誠実に生きて、「こういう日本人もいるんだ」と子どもが思うよう、態度で表したいと思っている。

そして私は日本人として、韓国人に、赦され、愛され、生きている。人間として、神に許され、愛され、生きている。それは私だけでは無い。「韓国併合 100 周年」、真実の出会いのため、おいでませ、韓国。

（なかむら かおり 韓国在住）



農作業の合間の村のハラボジ

在日朝鮮人の本名問題から何に気がつくべきか = 歴史の節目 100 年を迎えて考える日本の朝鮮植民地 = 金光敏

日本の朝鮮半島植民地支配は、永久に朝鮮半島を日本の支配下に置くことを想定して始まった。この「幻想」が日本のアジア侵略の本質であった。植民地支配政策のひとつに「創氏改名」がある。在日朝鮮人の多くが現在も日本名を使っているが、日本による朝鮮人植民地支配の残滓であることは言うまでもない。

日本政府は朝鮮の植民地支配について、国際法上合法的であったとの見解に立つ。支配された側の大韓民国も、朝鮮民主主義人民共和国も、支配は強制占領であり、当初から不法であったとの立場だ。この根本的な立場のちがいが、在日朝鮮人の差別を放置させた原因となった。

植民地支配を合法とする日本政府の見解に立てば、その下で定められた法律、制度のすべてが合法であり、廃止手続きがなければ、法体系は存続する。日本政府は、1965年の「韓日条約」で、日本による韓国（朝鮮半島）の統治は「もはや無効である」とし、この条約を持って韓国内（この場合は大韓民国政府を唯一の政府と認めることで、朝鮮半島全体と解釈する）の日本の権益（日本統治の支配権）は無効となったと解釈した（韓国政府の見解はちがうが…）。

一方、この条約の効力は韓国国内に対するものであり、日本に残留する朝鮮人には及ばなかった。日本名使用を強要した「創氏改名」の法体系は、在日朝鮮人には続いた。「創氏改名」で強要された朝鮮人の日本名は行政文書に残され、創氏改名政策を温存させた。

在日朝鮮人の名前をめぐる意見は多様だ。当事者間でも意見差がある。名前を名乗ることは、自己表現の基本であり、人権そのものだ。自己決定が重要である以上、「日本名」を選択することも人権として保障されるべきだとする考えも少なくない。最近では、「朴」「金」「李」などの民族姓は残るものの、名が朝鮮語音では難しい名前も多く、加えて日本国籍を持ち、日本姓で戸籍を持つ朝鮮人も増えたことで、在日朝鮮人をめぐって使われ

てきた「本名」という用語では全体を説明することが難しくなっている。こうした朝鮮人（日本国籍者も当然含み）社会の名前使用の実態から、なおさら本名（民族名）を使うか、日本名を使うかは個人の自己決定の問題だとする見方が強くなっている。もっともらしい。

ただ、敢えて「それはちがう」と言いたい。

朝鮮人の本名（民族名）使用が個人の問題だとされ、自己決定やプライバシー保護の観点で取り扱われることは、一見正しく見えるが、日本と朝鮮半島、そして在日朝鮮人の歴史を振り返り、「名前」使用に関わる朝鮮人自身の自己決定権の本質を見れば、「人権」とはほど遠い社会環境の中で名前問題が取り扱われてきたことがわかる。

本名・民族名での社会生活の難しさは過去も現在も同様で、生活上のリスクを最小化するために日本名を使わざるを得ない。就労を見ても、接客業や職場の“和”を重視するなどの理由から日本名使用が求められ、住宅探しでは、不当性を判断した1993年の判例が確立してもなお、入居差別は放置されている。言うまでもないことだが、通称名としての「日本名」は海外では通用しない。また、通称名は任意で変えられ、旧植民地出身者以外の外国籍者が「通称名」で公文書の作成はできない。通称名の法的効力はきわめて危ういものだが、朝鮮人には学校で通称名の「日本名」で出席番号が振られ、公簿である卒業証書にも「日本名」が書き込まれる。

在日朝鮮人につけられた「日本名」使用は国策に起因し、植民地統治の延長だ。国策の誤りを「個人」の自己責任で背負わされているのが在日朝鮮人の「本名・民族名」問題の本質である。在日朝鮮人の本名・民族名問題から、植民地統治の残滓を知り、その克服に日本人自身がすべきことを気付いてほしい。ちょうど今年が100年目の節目でもあるから。

（きむくあんみん NPO法人コリア NGOセンター 事務局長）

李姫鎬 『夫・金大中とともに』 (朝日新聞出版)

磯貝 治良



文学の世界では近頃、近代文学の「感動の美学」を解体させることがハヤリになっている。それは時代の要請でもあるが、他方で、「感動」が人間の精神の営みから失われることに、危機感も覚える。

そんな折に『夫・金大中とともに』を読んで目からウロコが落ちた。人を励ましてやまない、「感動」を超えた感動が、この一冊には詰まっている。副題に「苦難と栄光の周り舞台」とある。まさに稀有な人生が一冊の書物になった。

本書は著者自身の生い立ちから始まるが、金大中とともに暗闇に一条の光を求めて生きる歳月が圧倒的だ。受難のすえに栄光を得た金大中の政治家・思想家としての人生譜は、韓国の現代史を表象するものだった。

1960年代、議員選挙に失敗したあと、国会議員の椅子を得るや、軍事独裁政権の常軌を逸した迫害がはじまる。金大中の高い理論性と言論の舌鋒が、それとは対照的な政治家朴正熙大統領を怖れさせた、と著者は分析する。

1971年、初の大統領選挙では、朴候補側の目に余る「不正」によって惜敗するが、その結果は朴大統領をいっそう怖れさせた。1972年、維新クーデターに追われて日本に亡命。1973年、KCIAによって白昼、東京のホテルから拉致され、一命は救われたものの自宅軟禁。1976年「三・一民主救国宣言」を発して逮捕され仮釈放後、ふたたび自宅軟禁。1980年光州民衆蜂起が起きると、「内乱陰謀罪」を捏造されて、軍事裁判で死刑を宣告される。死刑囚として2年余り収監されたのち、刑執行停止後、アメリカに亡命。1987年、再度大統領選挙に出馬するが落選してのち、民間人とし

て民主主義と統一のために精力的に活動して、1998年に大統領就任。ノーベル平和賞を受賞する。そのような歴史の嵐のなかで、著者が夫とともに、家族とともに、どのように生きたかを語るのが本書だが、「裏面史」ではない。

この一冊がわたしたちに伝えるのは、苦難の政治家を支えたパートナーの役割だけではない。それ以上に、自立した女性の人生譜なのだ。韓国における戸主制度の撤廃など男女平等の実現に著者がいかに情熱を傾け、寄与したか、そしてキリスト者として「貧しい子ども」のために献身し、同時に、自由と民主主義のために主体的に生きた、その彼女自身の軌跡と、伴侶をパートナーとして生きることの意味の大きさが伝えられるのだ。

2000年のあの歴史的な南北首脳会談と6・15宣言の折のエピソードがひととき印象深い。金正日国防委員長のウイットに富んだやわらかい人柄の描写。その一方で、共同宣言の内容をめぐる話し合いが難航していたときの一齣。

〈少し休憩するために戻ってきた彼（金大中）は、とても疲れたようだった。再び会談場に向かうときには杖が必要だった。足取りも重い彼の背中は孤独で、疲労がにじんでいた。しばらく見送りながら立っていると目頭が熱くなり、人に見られまいと、すぐに目を拭った。重大な責任を担った人は、決定的瞬間に恐ろしいほど孤独だ。その日の彼の姿は、結婚してからいっばん孤独に見えた〉

そうして実現した宣言後の晩餐の席、南北の参席者がよろこびで大騒ぎする光景を見て、著者は記す、〈立ち居振る舞いを見ていると、どちらの側か区別がつかないほど、私たちは間違いなく一つの民族だった〉。

（いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表）

デイ・サービスセンターの働きと私の思い

芦田 聡

私が聖公会生野センターの事業であるデイ・サービスセンター（以下デイ・サービスセンター）を担当させて頂きまして早3年が経ちましたが、デイ・サービスセンターの日常の姿をご紹介したいと思います。

当デイ・サービスセンターでは、障がい者の社会参加や憩いの場作りに取り組んでおり、主に知的障がい者、精神障がい者を中心にご利用頂いております。活動としては①美術活動②音楽活動③余暇活動④宿泊体験⑤生活訓練の5本を柱としております。私がデイ・サービスセンターを担当させて頂いた初年度は長屋風の建物で、音楽活動や、宿泊活動を行うことはできなかったのですが、現在はそれらの活動ができるスペースを関係者の皆様方に与えて頂きました。のびのびと活動することができるようになり、当事者の方々にもご満足頂けているかと思っております。宿泊活動では、普段の関わり合いだけでは見えないような事も色々



宿泊プログラムの楽しい夕食

見えてきます。この方は以外とよく寝られる方だとか、目覚めが以上に早い方など……。私も普段の生活では割と早く起きています。追いつきませんが……。追いつきません。食事の好みも様々なので、出来るだけ栄養面、嗜好面等を考慮して食事も作れたらなぁと考えます。ちなみに食事を作ることは大好きです。家でもよく作ります。連れ合いに褒められます。買い物も経済的に行います。自称いい「旦那様」です。話が脱線しました……。利用される方が増えるにつれ、外出活動は以前よりはできていません（お手伝い頂ける方も随時募集しています）。しかし、このスペースを利用しておこなえる活動が増えてきたので、まあいいかなと感じております。今後はスタッフ数含め、利用される方により良いサービスの形を求めていると考えています。なるべくアクティブに様々な方と接する機会を作れたらなぁと考えています。

最後になりましたが、当然私一人の力では、成し遂げることができないことも多々ありますので、その節は皆様方のお力添えの方よろしく願い致します。

(あしだ さとし デイサービススタッフ)

2009年度聖公会生野センターを支えてくださった方々。ありがとうございます。団体等でとりまとめて送金して下さった方もいらっしゃり、名前が出ていない方も多くいらっしゃいます。併せて感謝申し上げます。

(敬称略/順不同) 於：2009年4月1日～2010年3月31日

【正会員（1口10,000円）】

石脇慶聡/須佐美浩一/岡本勝/宮脇博子/尾崎茂雄/嵯峨崎順子/五十嵐正司/佐藤耕一/日比谷潔（2口）/中村 豊・道子（2口）/宮嶋真/井田泉/青柳美知子/佐野信三/竹林徑一/吳光現/齊藤壹/齊藤祥子/こひつじ乳児保育園/張聖子/武藤謙一/長野泰信/春名 英夫/大西修（3口）/木村多恵子/古澤陽代/大橋襄/猿橋 靖・正子/伊藤美佐子/奥田哲夫/山本保彦/木村幸夫/城下彰/（有）冷麺館（代表：春山宗治）/岡野利治/小山俊雄/大田美智子/小出裕司/岩城聡（3口）/大阪聖パウロ教会/名護聖ヨハネ教会/松蔭女子学院（2口）/三浦恒久/岩城健太（2口）/磯晴久/日本聖公会大阪教区婦人会/黒田裕/井上進次/村上恵依子/宇野徹/野村潔/社会福祉法人博愛社（以上合計 ¥580,000）

【後援会員A（1口3,000円）】

勝屋矯子/植田哲子（5口）/岡田まり子/大久保忠昭/佐藤千鶴子/当舎あずさ/香山まり子/松居勲/辻本秀子/橋本祥子/中原恵/社会福祉法人 St.Michael's 聖ニコラ保育園/福永芽久美/吉岡容子/目崎宗世/古谷美子/小川昌之/神谷尚孝/内藤昇/古澤秀利/岩城健太/大塚勝/塩田純子/佐々木庸/井口諭/黒田益弘/保坂久代/松本一郎/辻節子/小林満寿子/後藤聡/森中央/林香代子（5口）/孫裕/越山健蔵/久下克己/中和子/石田浩子/小山紀巳子/吉井ミツ/関正勝・澄子（2口）/橋本克也/佐治孝典/泉迪子/後藤由江/米満司郎/東敏勝/穂山加世/伊地知紀子/藤川治彦/小室一/榎本房代/岡田初子/山口瑳智子/富谷晋/百井幸子/今中富美子（2口）/吉田哲子/櫻井亨/野上千春/吉田常夫/園部勝/関ノリ子/木下勝/福田順子/畑野栄一/茂木節子/高田須磨雄/河野裕道/広谷和文/平田強治/近澤淑子/内田真理・中村香・光・由香里（4口）/宮橋コウ/小林幸子/石橋聖トマス教会（40口）/雨宮 大朔/李相善/山田拓路/小林廣司（以上合計 ¥432,000）

【後援会員B（1口5,000円）】

武藤六治/辻彩乃/藤永壯/松浦順子/岩坂正雄（2口）/真鍋倫子/中島千恵子/井原洋子（2口）/前原ひろ/竹林敏子/浮田真理/金光秀晃/姜聖律/松本正俊/植松誠/井上進次/中山一郎（2口）/中芝永次/山根博子/増岡広宣/池本則子（2口）/本吉聡/康実/児玉勢津子/笹森田鶴/宗像和雄/高田日出男/後藤恵美子/田辺聖公会愛の園シオン会（2口）/久保道則/金光秀憲/アジア国際夏期学校/大畑喜道/宇野徹（2口）/石井英隆（2口）/若宮英生/趙秀一/糸井玲子/石橋聖トマス教会/裏重度（以上合計 ¥265,000）

【維持会員A・B（A 1口30,000円/B 1口50,000円）】

宮嶋真/武藤六治（以上合計 ¥80,000）

【学生会員（1口1,000円）】

吉村元位（2口）/荻野直人/浅海由里恵/眞子義人/小林令子（以上合計 ¥6,000）

【一般献金/クリスマス献金】

豊田英子/山口瑳智子/済州島ツアー参加者有志/マリア/山本勇造/杉本イク子/浮田真理/寺本眞名/大阪聖パウロ教会/岩城健太/生野学習会参加者一同/京都教区宣教局社会部/南地区4教会合同礼拝信施/信谷家/秋元淑子/邨田志津子/篠田茜/舟茂敏雄・恵子/尼崎聖ステパノ教会/日本聖公会北関東教区/広島平和礼拝実行委員会/宗像和雄/土田基子/賀川督明/大阪聖アンデレ教会/原田光雄/金永子/後藤由江/後藤恵美子/西宮聖ペテロ教会/加地隆一/園部勝/緒方貴子/松本一郎/山根博子/保坂久代/関ノリ子/鈴木満紀子・慰/中芝永次/植松誠/増岡広宣/大橋襄/森中央/内藤昇/日本聖公会京都教区京都伝道区婦人会/冷麺館（代表：春山 宗治）/小室 一/前原ひろ/丁章/村上守旦/中山一郎/久下克己/瀬山義美/米満司郎/尼崎聖ステパノ教会婦人会/今西政弘・晴子/岡本愛子/姜聖律/東京聖テモテ教会奉仕会/古谷美子/目崎宗世/越山健蔵/吉田立/日本聖公会大阪教区婦人会/松本正俊/福田順子/聖公会沖繩福祉会聖マルコ保育園/武藤六治/学校法人プール学院/鈴木憲二/松本一郎/大洲幼稚園/社会福祉法人 St.Michael's 聖ニコラ保育園/日比谷潔/中村大蔵/岡野利治/山下里加/芦屋聖マルコ教会附属愛光幼稚園/石橋聖トマス教会/西宮聖ペテロ教会婦人会/渡壁忍・デシアナ/崔浅子/岡嶋彦一/木川田一郎/堺聖テモテ教会/小出裕司・幸代/関正勝・澄子/辻彩乃・吉郎/林香代子/江野隆夫/大田 美智子/尾崎茂雄/草ヶ江幼稚園園児一同/中岡千鶴子/久留米天使幼稚園/川口基督教会婦人会/大阪聖アンデレ教会婦人会/城下彰/平安女学院大学キリスト教文化センター/京都聖三一教会/宇野徹/橋本祥子/香山まり子/小杉尅次/神谷尚孝/木村多恵子/下鴨幼稚園/平安女学院中学・高校チャプレン室/西宮聖ペテロ教会/植田仁太郎/市川聖マリヤ幼稚園/趙秀一/若村正博/豊田幼稚園/守口復活教会/林寛子/水口正樹/千葉復活教会/聖マリア幼稚園/戸塚泰子/糸井玲子/桃山キリスト教会/まこと保育園/伊藤美佐子/井原洋子/岩垂悦子/名古屋聖マタイ教会/山本眞/堺聖テモテ教会/大阪聖愛教会/百井幸子/北山和民/森紀旦/逗子聖ペテロ教会/恵我之荘聖マタイ教会/愛信福祉会/日本聖公会東京教区聖パウロ教会/相澤牧人/聖ミカエル保育園/市川聖マリヤ教会/齊藤壹・祥子/長野泰信/聖光教会/聖マテア心豊苑/立教学院（チャペル）/前田良彦/沼津聖ヨハネ教会/神戸昇天教会/目白聖公会/宮古聖ヤコブ教会/在日本韓国YMCA/松戸聖パウロ教会/島袋諸聖徒教会/横浜聖クリストファー教会/在日大韓基督教会大阪教会/銚子諸聖徒教会/小松淳子/伊藤美佐子/初雁幼稚園園児・職員一同/立教女学院/札幌聖ミカエル教会/ウイリアムス神学校学生会/のりばん利用者・スタッフ一同/デイサービス・クリンもだん利用者・スタッフ一同/アートサークル/無名献金/3・1信施金（以上合計 ¥4,646,629）

生野センター2009年度会計報告 単位(円)

区分	勘定科目	決算
経常活動による収支	収入	
	受託事業収入	9,004,396
	利用者負担金収入	7,452,820
	会費収入	1,390,000
	分担金収入	2,320,000
	寄付金収入	4,920,662
	雑収入	176,665
	助成金収入等	475,000
	経常収入計(1)	25,739,543
	支出	
事業費支出	6,489,055	
事務費支出	5,672,919	
人件費支出	16,051,518	
積立金	150,000	
借入金返済	0	
経常支出計(2)	28,363,492	
経常活動資金収支差額	-2,623,949	

借入金	新拠点	金額
	大阪教区	4,500,000
	京都教区	4,500,000
	合計	9,000,000

呉光現

「在特会」という団体をご存じだろうか？正式名称は「在日特権を許さない市民の会」である。私はその名前は知っていたが昨年埼玉県で国外追放を巡って両親と中学生のフィリピン人の家族を彼ら／彼女らは「攻撃」した。なんと彼女が通う公立学校や自宅をデモコースに入れて「不法外国人は帰れ」と叫び続けたのである。人権侵害そのものであるこのようなデモを許可した警察は何をしているのだろうか。それ以降、彼ら／彼女らの直接行動はエスカレートしていき、大阪の韓国領事館、生野区の在日密集地域、京都の在日高齢者の介護施設等をターゲットにして行動を起こしたり、起こそうとしている。そこには少なくないクリスチャンもいる。

私は知っている。ナチスが政権についたのは当時の最も進歩的であったワイマール憲法下の

ぞろぞろ出てきた嫌な輩たち

ドイツでの選挙であり、日本の憲法は世界でも類を見ない「平和主義」「民主主義」「平等主義」に貫かれたすばらしい財産であることを。

ヨーロッパでは極右（極右政治家、極右政党等）の規程があるそうだ。「外国人排斥」がその条件である。東京都知事の石原さんが「第3国人」「中国人はDNAが違う」等の発言を臆面もなくしているが、ヨーロッパの規程で言うともまさに「極右政治家」である。今回の参議院選挙でも在特会は在日の現職（国籍はもちろん日本である）候補者に対して執拗な攻撃を加えたそうだ。彼は父が韓国人、母が日本人の日本生まれである。選挙ポスターには「母なるニッポン。父なる韓国」とあり韓日の架け橋になろうと議員になった人である。幸い当選したが、「平和憲法」を持つ日本が「ワイマール憲法下のドイツ」にならないように今こそ市民一人一人が考えて、動く時ではないだろうか？（お くあんひょん）

余韻

■ゲリラ豪雨が日本各地を襲っているが、この異常気象は日本だけでないのはみんな知っている。地球を含む大宇宙のわずかな変化が大きな影響を与えているのか？人類の営みはその結果を生んでいるのかはまだ結論は出せないだろうが……、少なくとも私たちの経済生活を見直す時代に入ったと思う。人工衛星から見ると貧しい国々（北朝鮮、アフガニスタン、アフリカ諸国）の夜は本当に暗い。大変な生活をしているのだろうと思いを馳せると同時に、私たちの生活はこれでいいのかと考えさせられる。皆さんはいかがでしょう？■今年に入って大阪教区の教会訪問の機会を与えられている。すでに6教会を訪問したが一言に聖公会といっても微妙に礼拝のムードが違う。人と会うのが楽しい私にとっては、始めていくところに対する少しの緊張と新しい出会い、久しぶりの再会の機会が与えられて毎週違う教会で神様のみ言葉に接することができるのは「この仕事」の特権かな？と思いつつ主日がしみなこの頃である。連れ合いと一緒に普段通っている教会に行けないので少々不満かな？■大学が大変だ。最近は大学の教員が営業にまわっている。中には国境を越えて韓国・中国にも学生集めに行くそうだ。僕たちの時は「教育」と「研究」が仕事だったのだが……。何でもかんでも「効率」「成果」とプレッシャーの中で生きている社会はどこか無理をしているのでは……。日本、韓国が自死（自殺）率が高いのはそんな社会と無関係とは思えない（ぴっくあんちゃ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 10,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円から
 - ・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
普通預金 4654965「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0002
大阪市生野区小路3丁目11番19号
TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869
E-mail: ikuno@nssk.org
<http://www.nssk.org/province/ikuno>
発行人：大 西 修
編集人：大 橋 襄

ウルリムは再生紙を使用しています。